

【セッション①】グローバル・マインドセットで拓くスポーツの未来

～言語・文化を超えて共創する力～

登壇者(敬称略) ※肩書はイベント開催 当時のもの	松井 裕樹 メジャーリーガー・サンディエゴ・パドレス所属 岩村 明憲 元メジャーリーガー／株式会社福島野球団代表取締役 長谷川 滋利 元メジャーリーガー タカサカモト フットリング代表・作家
モデレーター(敬称略) ※肩書はイベント開催 当時のもの	稲垣 弘則 当協議会代表理事／西村あさひ法律事務所・外国法共同事業 弁護士 パートナー

稲垣:今日のテーマが「グローバル」だということを先ほどお話しさせていただきました。スポーツ産業がグローバルに発展していくためには、海外の企業や海外のスポーツ団体、さらには欧州評議会といった各国のナショナル・プラットフォームと真の信頼関係を築いていくことが必要になります。今日、ご登壇いただいている方のうち、岩村さんと長谷川さんがアメリカに渡られてメジャーリーガーとして活躍される上で、言語や文化の壁をどう越えていらっしゃるのかをうかがいたいと考えています。

サカモトさんは、後ほど自己紹介をいただきますが、今日はビデオでご登壇いただく松井裕樹選手や山本由伸選手、サッカーの遠藤航選手といった名だたるアスリートの言語学習のサポートやマインドセットに関するサポートをされている方です。そのサカモトさんがこれまで培われてきたご経験から、この協議会はもちろん、企業のステークホルダー、スポーツ団体がこれから世界で戦っていくに当たって、こういったマインドセットで戦っていけばいいのか、そういった手がかりになるセッションにしたいと考えております。

最初に岩村さんに伺います。言語と文化の壁を越えていくに当たって課題としてお感じになったのは何だったのでしょうか。

岩村:2007年～2010年の4年間ではありますが、アメリカでプレーをさせていただきました。メジャーリーグを夢見て、目標にした頃から、英語と文化を、異文化を受け入れる準備はしていました。日本のプロ野球でプレーしていた当時、外国人のチームメイトたちと、あえて通訳抜きで一緒に食事に行ったりしていました。まともな英会話教室には行ったことがなかったので、当たって砕けるようなところはありませんでしたが、必死になってしゃべっていると、外国人選手たちもその思いをくんでくれて、コミュニケーションが取れるようになりました。

野球という競技を通じてのことでは、それほど多くの言葉は必要ありません。ただ、生活をしていくことについては、非常に難しかったところがあります。自分が住んだのはフロリダだったので、東海岸と西海岸の違いも多々あるとは思いますが、東海岸の文化を受け入れるのも、生活拠点を移して野球をそこでやるのだという非常に強い覚悟が必要だったというところがありました。

稲垣:続いて、長谷川さんにも同じ質問をさせていただきます。

長谷川:私の場合、メジャーリーグの春のキャンプの時は通訳の方がいたのですが、その方が辞めることになったので、4 月、5 月は本当に何も通じない状態でした。ある程度は英語を勉強していったつもりでいたので、通訳なしでもいいやと思ってはいましたが、最初の遠征のとき、日本と勝手が違うので戸惑いました。例えばホテルで、電話をしないと荷物を持ってきてくれないとか、困ったこともありました。逆に通訳がいないことで、エンゼルスが最初の私のチームでしたが、周りの選手たちが結構助けてくれたということが非常に印象に残っていますね。

その後、マリナーズでプレーすることになって感じたのは、エンゼルスの時のプレーヤーの方で、「長谷川、あの時、頑張っていたな」みたいなことを言ってくれたということですね。マリナーズ時代は、ある程度英語を話せるようになっていたので、普通のアメリカ人みたいな感じで見られていたと思いますが、今でもお付き合いがあるのは、やはりエンゼルス時代の選手が多いように思います。

日本にいる時も、少しでも日本語を話そうとしてくれる外国人選手には愛着が生まれますし、一緒にプレーしていても、とっつきやすい選手だなと思っていたので、私も下手でも、とんちんかな英語でもいいので、話をしようとしていました。完璧な英語で話そうとするのではなくて、努力している姿を見てもらったのが、チームに溶け込めた第一の要因だったと思っています。

稲垣:今のお話には、いろいろなヒントがあったと思います。

では、次にサカモトさんにご発言をお願いいたします。サカモトさんは、作家でいらっしゃるんですが、メキシコからブラジルのサントスに渡られたという異色の経歴をお持ちです。ご著書も3 冊あり、アスリートに対する語学サポートに関するご著書を最近出されたところですよ。今日のテーマの中で、ご自身が考えておられる大きな課題について一言頂けないでしょうか。

サカモト:私自身は、アスリートではございません。それから、今はグローバル・マインドセットのエキスパート風の肩書きをいただいておりますが、私は 18 歳まで鳥取で育ちまして、18 歳まで鳥取弁しか話してきませんでしたから、グローバルというよりは、ベースはローカルなところにある人間ではございます。

そのように、インターナショナルなバックグラウンドがあったわけではない中、留学先のメキシコで、行きつけの屋台でそのまま仕事をもらってタコス屋になっていたり、その後はネイマールというブラジルの選手のプレーを YouTube で見て感動したのをきっかけに、その当時、彼が所属していたサントス FC というところに行って、そのままスタッフにさせていただいて、その後、J リーグクラブの通訳をこちらでさせてもらうようになりました。そのような形で私は日本にいらっしゃる外国人選手をアテンドする側でしたので、そういった経験を生かして、逆に日本人のアスリートが世界で、野球選手であれば野球、サッカー選手ならサッカーという一番得意とされている競技の部分で純粋に評価をして、信頼と立場を勝ち取っていくためのサポートをしていこうと考えまして、そのカギになるのは言語や文化ではないかと思いました。

その上で、アスリートにとっても、ビジネスサイドにいる者にとっても大切だと思っているキーワードとして「想像力」と「機転」という 2 つを自分は大切にしております。後ほど、松井選手のスピーチの中でも具体的な話は出てくると思いますが、やはり日本育ちで、言語をマスターするといっても、ネイティブ並みにはなれませんし、文化を知ろうと思っても、もちろん、その土地で育った人ほどには習熟できません。でも、そこを乗り越えて、海外の人たちと、お互いにほんの少しでも、同じ側にいると感じられるような関係を作っていくことが大切だと思っています。そういった意味で言語の壁、文化の壁を努力して取り払う過程の中で、それを加速させてくれるのは、しっかりと相手に対する想像力を持つこと、そして、機転と言っているのは、ちょっとした工夫によって、突破口が開けるのではないかという趣旨です。

稲垣: 松井選手の名前が出ましたが、松井選手には、いつからこういったサポートをされているのでしょうか。

サカモト: 松井選手からは 2019 年頃、彼が将来的なメジャー移籍も視野に入れながら、その前に、まずはチームメイトの外国人選手とちゃんと英語で話をしたいというお話をいただきました。それからオンラインで、マンツーマンのサポートをずっとさせていただいていました。それまで英語のレッスンのみでしたが、サンディエゴ・パドレスに移籍が決まった時、彼が入団記者会見を英語でバシッと決めたいとおっしゃったので、それをやってみようと一緒に準備をさせていただきました。

稲垣: その入団記者会見の背景というか、その後どのように球団に溶け込んでいったかを、松井裕樹選手ご本人からビデオメッセージを頂いておりますので、ご覧ください。

.....

【ビデオメッセージ】

松井: サンディエゴ・パドレスの松井裕樹です。

今までの入団会見の中で一番の英語の会見にしようというのが目標でしたが、サンディエゴというスペイン語圏の方がたくさんいる場所に決まったので、スペイン語も織り交ぜながら、今までの歴代のメジャーリーガーの中で一番の会見を目指そうということになりました。

最初はカッコ良く英語で話せたらメディア受けするだろうなというところから始まりましたが、やっているうちに熱が入っていききました。現地のメディアの方からも、最初に「Amazing」と言っていたいただきましたが、チームメイトもニュースなどで見たらしくて、本当に「お前、やるじゃねえか」みたいに、向こうから話しかけてくれることがたくさん増えました。まず、英語で話してもいい存在なんだということを、チームメイトに知ってもらえたので、それが受け入れてもらう初めの糸口になったのかなと思います。

スペイン語圏の選手に、英語で話をするのとスペイン語で話をするのだと、距離の縮まり方が全然違ってきます。やはりドミニカだったり、ベネズエラだったり、キューバだったりという選手に対して、スペイン語で一言、すれ違う時にあいさつするだけでも、「お前イケてるな」となって、次からはもういきなり肩組んで「おい、調子どうだ」って言ってくれるような距離の縮まり方になります。ですから、本当に仲間に入れてもらった瞬間というか、スペイン語で会話ができ

るというのを分かってもらった時は、そういうふうに認めてもらえたのかなと思います。

日頃から会話を重ねられる存在でいるということが、信頼関係の第一歩だと思うので、球を受けてくれるキャッチャーとスペイン語で軽く言葉を交わすと、こいつはこういうやつなんだなと分かってもらえて、通訳を介さないことで、テンションや自分のキャラクターというのを察してくれたり、こういう時は何を考えているのか、分かってくれたりするようになります。競技においても言葉が相手を知る、信頼してもらう、信頼していくというところの第一歩になっていると感じました。

渡米する以前は10年、日本のプロ野球に所属させていただきましたが、その歴史を見ても、活躍している外国人の方は、日本の文化になじもうとする、チームメイトになじもうとする姿勢が強く出ているということに気づきました。僕が実際アメリカに渡った時にも、それは逆の立場として生きてくるのではないかという仮説があって、実際、言葉によるコミュニケーションの円滑さや文化に適應する姿勢を見せることで、相手からすごく信頼をもらえたり、そういう姿勢を見せることで、より手助けをいただけたりということを強く感じる2年間でした。選手会の食事や投手会の食事などのタイミングで、通訳を連れて行かずに、選手の中だけに僕が飛び込んでいく。言っていることが分からないタイミングもありますが、僕が1人で来ているということのをうれしく思ってもらえるというのを、すごく感じました。

それは「大丈夫か」という感じではなくて、「お前、1人でよく来たな、俺が助けてやるから何でも言ってくれよ」という感じで、チームメイトとの会話も生まれますし、僕が英語をしゃべろうとしている姿勢を見て、逆に「日本語ではこれなんて言うんだ」とか「日本の時はどうやってたんだ」とか、僕が心を開くことによって、僕に対しての興味も増していった、先ほど言った信頼関係というところの第一歩につながっているのかなと思っています。

海外に来てから、より多くの方々に、多くの会社さまにサポートをいただいて、選手生活が送れているというのを強く実感しています。

また、ここにご来場の方々は日本のスポーツ界の中核の方々とお聞きしています。皆さまで力を合わせて日本のスポーツ界を世界の中心にすべく、僕もその力に少しでもなれるように頑張っていきたいなと思います。

.....
稲垣:この松井選手からのメッセージについて、サカモトさんにお伺いしたいのですが、スペイン語を織り交ぜながら、というようなところは、サカモトさんのアドバイスがあったのかというところ、今のメッセージには出てきませんでしたが、歌のエピソードもあったと思いますので、そこも皆さんに共有いただけたらと思います。

サカモト:先ほど申しましたように、私はメキシコに住んだ経験もあって、スペイン語ができたということもありましたが、松井選手もおっしゃったように、サンディエゴはメキシコとの国境に近く、人口の半分近く、それ以上にスペイン語を話す方がいてファンもスタッフもスペイン語を話す方が非常に多いという環境でしたので、全部ではなくても、スペイン語のフレーズが入っていたほうがいいと考えました。

先ほどの機転というところでいうと、同じスペイン語でも、スペインのスペイン語ではなくて、メキシコの人でないと分からないスラングや駄じゃれを、ピンポイントで入れさせてもらいました。ただ、それは私がアイデアとして出ただけであって、結局は松井選手が、それが必要だとか、やりたいと感じるという彼自身の感性や姿勢が一番重要だったのだと思います。

今おっしゃっていただいた歌のエピソードというのは、もともと彼が日本で楽天球団にいた時に、アラン・ブセニッツっていう同じ中継ぎ投手の同僚がいました。アメリカの野球選手には音楽好きな選手も多くいますが、カントリーソングを聴く選手が割といて、そのブセニッツ選手が好きだからということで、松井選手は 1 カ月ぐらいかけて完璧に歌えるように練習して、それを披露したら、一気に距離が縮まって、お互いに楽天を退団した今でも関係が続いているという話です。

松井選手は、パドレスに移籍してから、移動の飛行機の中でたまたまその曲が流れたので歌ったらしいんです。そうしたら、東海岸などカントリーをよく聴く地域の出身の白人の選手が「お前、これ知っているのか」となって、「これを知っているのは通だな」みたいな感じで、一緒に歌ったということになったそうです。そういったことをやっていると、逆に向こうの選手が、松井選手の使っている日本語の登場曲をロッカールームでかけてくれたというようなこともあるようで、それこそ言葉の限界を少し超えてくれるツールとして、音楽がすごく効いてくるという話を伺っています。

稲垣:想像力と機転とおっしゃいましたが、松井選手自身が、相手の立場に立って、自分で飛び込む姿勢を見せることで相手に信頼され、そういったところを自分で考えながらやっているところを非常に強く感じました。

そこで、岩村さんと長谷川さんには、今のお話にあった想像力と機転といったような具体的なエピソードがあれば、ぜひ伺いたいと思います。

岩村:歌のことは自分もやったことはあります。メジャーリーグの場合、移動のためにバスが2台～3台用意されます。そのうちの1台目は基本的にコーチングスタッフとメディアとチームスタッフが乗って、選手は2台目というような位置付けでした。当然、自分は2台目に乗りますが、通訳は選手バスには乗れません。

バスの中ではやはり、ルーキーの洗礼みたいなものがあります。とにかくルーキーは面白いストーリーを話すか、歌を歌うか、どっちかだという話があったので、当時は単語をつないでコミュニケーションを取ることはできるんですけども、英語でストーリーを話せというのはハードルがすごく高かったので、僕はその時、ビートルズの『レット・イット・ビー』を英語で歌いました。それが功を奏したというか、歌を使ってコミュニケーションしたことで、そのバスがホテルに着いて、次の日にスタジアムに行った時には、コーチ、メディア、僕がバスの中で英語の歌を歌ったというのが広まっていました。そういう当たって砕けろの精神でいけたことが、外国、異文化での生活をしていく一つのきっかけになったのはあると思います。

稲垣:歌という形で壁を越えていくようなことでしょうか。

岩村:そうですね。先ほど松井選手も言っていたように、自分が心を開くことによって、向こう

からも来てくれるというのは、受け入れなきゃいけない文化だと思いました。

稲垣:長谷川さんはそういったエピソードはございますか。

長谷川:はい。まず最初の会見ですよ。松井君のを見ると「負けたな」と思いましたが、私の場合は関西人なので、関西人とアメリカンジョークっていうのが何となくかぶるんです。

実はメジャーに行く前にも自主トレで、カリフォルニアに3年連続ぐらいで行っていたので、アメリカンジョークと関西のジョークっていうのは似ていると思っていました。そこで会見の時も、ディズニーがエンゼルスオーナーだったので、ピッチャーはミッキーマウスで、キャッチャーはミニーマウスだって、いま言うの大して面白くないんですけど、その緊張した場面で言ったところ、ドッカーンと受けました。まあ、つかみはOKだ、みたいにはなりましたが、正直なところ英語は自己流だったので、松井君ほど上手じゃなかったと思います。でも、最初のつかみっていうのは絶対大事なので、関西人はそういうところには強いかなとは思っています。

音楽の話では、私の場合、日本にいる時からロックが大好きだったのですが、エンゼルスの選手はカントリーかロックかに分かれていました。スコット・スピージオという選手は、自分でロックバンドを持っていたりもしていたので、彼とは一緒にロックコンサート行ったり、キャンプ中もチームメートに「みんなでコンサート行く？」みたいな感じでした。そうやって趣味が同じだということで、仲間意識が絶対に芽生えていたと思います。

それから、今も大好きなゴルフ。野球選手にはゴルフをする人が多いですし、日本と違ってピッチャーはシーズン中もゴルフをできるので、遠征先の休みの日や、ナイターの日だったら、試合の前に 18 ホール回ったりすることもあったので、そういう趣味で距離を縮めていくっていうのは、非常に成功したと思っています。

稲垣:向こうの文化にうまく合わせていくというのは、とても大事な観点だとは思いますが、逆に向こうの人たちに日本の文化を知ってもらうようなこともあったのでしょうか。岩村さん、いかがですか。

岩村:普通ならば、私たちが英語の単語帳や英会話の本を準備して読むというのは、当たり前にあると思います。私の場合、逆にチームメイトたちに日本語の本を贈りました。50 冊ぐらい準備して、クラブハウスに来る選手、裏方さん、チーム付きのメディアの方にも配りました。

稲垣:全員に？

岩村:全員にです。使っても使わなくても構わないけれど、われわれがしゃべるのはこういう言葉だよっていうのを知ってほしかったのです。

稲垣:使ってくれた人はいましたか？

岩村:いましたね。特にクラブビーと呼ばれるクラブハウスで働いている裏方さんですが、そのクラブビーたちがすごくそれを楽しみにしてくれました。場所がフロリダですから、日本にすごく距離があって、遠いところの文化を知るとというのは、なかなかありませんから、そういう意味では非常に喜ばれたお土産にはなりましたね。

稲垣:非常に面白いエピソードですね。長谷川さんからも、そういったエピソードがあれば是非お願いします。

長谷川:アメリカは歴史が浅いじゃないですか。日本は 2000 年ぐらい、それこそ縄文時代からの歴史がありますが、アメリカで歴史の話というのは、日本でいうところの江戸時代から明治維新くらいなんですね。その辺りの日本の歴史を聞かれることが多かったので、私自身は『竜馬がゆく』とかの小説を日本で買ってきて、読んで説明するみたいなことはありました。それからアメリカのチャンネル、「ヒストリーチャンネル」っていうのがあって、そこで戦争のことをよくやっています。しかも、ちょうど僕がアメリカにいたころに「パールハーバー」という戦争映画が公開されたこともあって、そうした話も結構突っ込んで聞かれるので、結構困りました。アメリカ人の質問に答えるために、いろいろ勉強したのを覚えています。

私は今もアメリカで生活していますが、一番思うのは、変に英語ができるよりも、日本人としての中身がないというのが一番困るので、英語は下手でもいいから日本人魂といいますか、そういうものを見せると、アメリカ人でも興味を持ってくれる人はたくさん出てくるのかなとは思っています。

だから、英語がちょっと上手にしゃべれることよりも、本当に野球に対して真摯に向き合っていると、あるいはロックとか、ゴルフでもいいですけど、野球以外のところでも何かできることがあると、認められるのかなとは思っていますね。

稲垣:歴史のお話というのは、向こうから日本の歴史を知りたいと聞いてくるわけですか？

長谷川:そうですね。

稲垣:それは文化の理解をしたいということなのでしょうね。サカモトさんはご著書にも書かれていますと思いますが、そういったところがコミュニケーションというか、海外で道を切り開いていくには、必要になってくるのでしょうか。

サカモト:もちろん出て行くのであれば、当然出ていく側が相手の文化をちゃんと知る、溶け込むって姿勢はある種のマナーとしても大事だと思います。一方で、向こうからしたら、「じゃあ、一体お前は何者なんだ」というところが当然あるわけです。そうすると、自分が何者なのかをちゃんと知っていて、それを説明ができることがすごく大事になると思います。

そういう意味で、日本の文化の良さを考えると、自分たちの中では当たり前の振る舞いや考え方をある程度、客観的に認識できていて、それを語れることが大切なと思います。それから、長谷川さんがおっしゃった歴史というのは、文化というものの中でかなり大きな部分を成すものだと思います。

ただ、必ずしも日本史の政治史とか戦後史とかのエキスパートになることだけが大切ではなくて、スポーツや特に文化という意味では、「こちら側」と「あちら側」に分かれているのではなくて、相手に「こちら側なのか」と思ってもらうことが大切だと思います。自分の具体的な例でいうと、地元の高校の大先輩にアシックス創業者の鬼塚喜八郎会長がいらっしゃいまして、アシックスの創業時のストーリーを講演で伺ったこともあります。ですから海外滞在中、アシックスを履いてランニングしているという方にお会いした時に、アシックスの創業ストーリー知ってるかい、戦後の青少年を非行から守るためにこういうことがあってみたいな話をしたことがあります。向こうは絶対習わない歴史ですが、スポーツ好きな人は、そういったことに興味を持っ

てくれたという経験はあります。

長谷川さんおっしゃったような戦争の時に何があったとか、この時代はどうでということも、もちろん知っていればそれが望ましいので、勉強はしたいなと自分も思っています。また同時に、特にスポーツへの愛というところが、お互いに「こちら側」になって共有できると思いますので、そこも意識しながら、歴史にもアプローチしてもいいのかなと思っています。

稲垣: 本日来場の皆様は、やはりビジネス関連の方々が多いところではありますので、今日のお話は日本のスポーツで資金の目詰まりが生じている中で、海外と同程度の産業まで拡大していくに当たっては、海外とのコミュニケーション、戦っていく姿勢というものがとても重要だと考えています。特に岩村さんと長谷川さんから、ご自身ご経験を踏まえて、ビジネスパーソンとして世界を切り開いていく上で、重要だとお感じになられているところを、最後にお聞かせいただきたいと思います。

岩村: やはり文化の違いというのは、すごく大きな問題だと思います。アメリカには国を代表する国技といわれる4大スポーツというものがあります。もちろん、その中には野球も入っていますが、日本でも野球が国技になっていることを信じてはいますけれども、アメリカにおける「ベースボール」と、日本での「野球」というものが、同じような文化としての扱いなのかなと言えば、疑問に感じる場所がありますので、まだまだわれわれがそれに向かってできることは、たくさんあるのではないかと思います。

例えば自分は2011年の東日本大震災を、楽天球団の時に経験をしましたが、ああいう大変な思いをされた後に、「じゃあ、何が」となった時に、いろいろな文化、音楽、スポーツが、人を支えるということを感じました。ですから、野球がそういうところで活躍してくれることをこれからも願っています。逆に使命感を持ちながら、自分もそういう形で取り組んでいきたいと思っています。

以上です。

稲垣: すごく大事なことです。ありがとうございます。長谷川さんは、いかがでしょうか。

長谷川: 私が初めてアメリカに行って初先発した時の話をさせてもらおうと、やはり最初の先発のときはすごく緊張するじゃないですか。その時、みんなに「Have fun」つまり「楽しんできて」と言われました。日本だと間違いなく「頑張って」だと思いますが、アメリカの場合は「Have fun」、要は競技を楽しんでくれ、これはゲームなので、楽しんでくれみたいな言い方だったので、そこがやっぱり日本とアメリカのスポーツに対する違いかなと思いました。

今、大谷翔平選手を見ていると、明らかにゲーム中でも笑顔が見えますし、バッティングの時は特に楽しんでやってるなと見えます。それはそれで日本も追い付いてきているのかなとは思いますが、どうしても私らの年代は、高校野球とかでも、「何とか道」とか、苦しんで勝利をつかめみたいところがありました。メンタルの勉強を現役中からずっとやっていますが、やはり楽しんでやるということで一番力が出ると、今は解明されてきているので、仕事も同じだと思いますが、苦しんでやるというよりは、どうやったら楽しみながら、仕事が本当に趣味と同じような感覚でやれるようになるかを考えた方がいいと思います。それが一番力を出せるはずで

すから。

それがアメリカで大活躍しているマイク・トラウト選手や、日本から行った大谷翔平選手の姿だと思います。恐らくアスリートの中でもトップの考え方は、楽しんで競技をするということだと思いますので、その考え方を日本人ももう少し取り入れていくと、能力ある選手がどんどん出てくるんじゃないかなと思います。

稲垣: それでは、最後にサカモトさんから、今日のお話から、どういったことがこれからわれわれにとって大事になってくるのかを、一言伺いたいと思います。

サカモト: 岩村さん、長谷川さんのお話は、本当にそうだなと思いました。その上で、アメリカのとか、野球のということではなくて、逆に日本のとか、侍魂のというところだけでお話しすると、私は他の国をいくつか訪ねたり暮らしてみた中で、日本はスポーツ大国だと思っています。それは何かというと、これだけいろいろな競技にきちんとスポットライトが当たって、それをテレビで中継もされて、楽しめる人の数が非常に多いというのは、この国の良い意味で特殊なところだなと思います。その意味では、ビジネス面での課題はあるとしても、スポーツ大国としての健全なプライドとか誇りを持っていて、それをこのように堂々と語れることは、日本人として誇るべき文化と言ってもいいのかなと思います。

まとめるとすれば、再三、申し上げている「想像力」と「機転」ということをすごく大切にするということと、やはり「あちら側同士」から「こちら側同士」になるにはどうしたらいいかを考えていく、というところに尽きるのかなと思っています。

稲垣: ありがとうございます。よく「スポンサーシップからパートナーシップへ」とスポーツの世界もいわれております。この後のちょうどセッションがそれに関連するものではありますけれど、真のパートナーシップというものを、日本国内だけではなく、海外でもグローバルにやっていくためには、今日お話しいただいたところも非常に参考になるなと個人的に感じていたところでありました。本日はご登壇いただきまして本当にありがとうございます。協議会がこれから進んでグローバルな発展を目指していく中で、非常に重要なヒントを得られたのではないかなと思っています。